

日本都市計画学会関西支部 平成 29 年度 和歌山フィールドワークの概要報告

【日 時】2017 年 10 月 7 日（土）14 時～17 時半

【参加者】12 名

【案内者】和歌山大学観光学部 永瀬節治 准教授

【趣 旨】

和歌山市は人口 36 万人の中核市ですが、産業構造等の転換や和歌山大学の郊外移転、百貨店の撤退などを経て、まちなかの人口は著しく減少し、賑わいも低下していきました。こうした状況のなか、2014 年からはまちの担い手をターゲットにした短期集中プログラム「リノベーションスクール」を毎年開催、2015 年からは和歌山市駅前通りを歩行者天国化する社会実験「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」が実施されるなど、公民連携によるまちなか再生が展開されています。

本年度第 1 回のフィールドワークでは、リノベーションによって事業化された複数の店舗などをご案内いただきながら、多様な事業者の方々とも意見交換を実施、和歌山市のまちづくりの課題、将来などについて考えました。

1. 南海和歌山市駅の東商店街「Forêt」にてツアー概要や市駅 GGP について概要説明

- ・和歌山大学生の DIY によって今年 8 月に改修された空き店舗
- ・20 年程使用されてなかった空き物件の再生過程に大学生が関わり、9 月の市駅“グリーングリーン”プロジェクト（市駅 GGP）にあわせて、雑貨等の手づくりワークショップ会場としてプレオープン。今後は本格的なオープンに向けて空間活用実験を行う予定である。
- ・予算 0 の状態でスタートしており、協力者を探しつつの運営であり、今後の展開が期待させるところである。
- ・市駅 GGP は、和歌山大学永瀬研究室と市駅前の商店街・自治会による「市駅まちづくり実行会議」が実施してきたまちづくりワークショップをきっかけに、2015 年から市駅前通りの一部を歩行者天国化し「緑と憩いの広場」をつくる社会実験として実施。
- ・天然芝を敷き詰めたピクニックエリアを中心にマーケットやオープンカフェを設けるほか、市駅付近を流れる市堀川（和歌山城の旧外堀）でのクルーズ船の運航や、周辺の店舗等で特別な体験プログラムを実施する「まちぐるみミュージアム」も展開している。
- ・2016 年からは、県警の理解・協力を得て、近畿圏で初となる 24 時間車両通行止めを実現している。



2. 水辺座（地酒バー）にてオーナーの武内さんから説明

- ・リノベーションスクール第 3 回・第 4 回案件、2016 年 10 月オープン
- ・市堀川に面する外壁を撤去して、開放的なガラス窓にリノベーション。水辺を眺めながら、和歌山の地酒を楽しむこ



とができる。内装には古民家の廃材を再利用している。

- ・水辺座の並びには、私有地を利用した社会実験の船着き場がある。

3. ミートビル1階店舗を見学 → 市堀川沿いの遊歩道 → 京橋駐車場「水辺 COMMON」へ

- ・空室のあった食肉会館を紀州まちづくり舎がプロデュース、2016年6月にカフェ29、同年10月にアメリカ直輸入服販売店、2017年8月に焼肉屋 meat×meet が入居した。業務用冷蔵庫のドアなどをそのまま生かしている。
- ・和歌山県は牛肉消費量が全国一なので、これを利用しようと企画。
- ・屋上でミートフェスわかやま（肉関係の飲食店が複数出店する）も2016年から開催。
- ・meat×meet には水辺のテラス席も設けられ、直接市堀川遊歩道に出られる。遊歩道は河川敷地となるが、既に占用許可を得ており、遊歩道にテーブルを出すことも検討中。
- ・遊歩道は平成10年に県が整備したものの、利用者は少ないのが実情。開放時間が9:00~17:00と限定されており、時間延長を希望する地元の声がある。



- ・市営京橋駐車場に設けられた親水公園「水辺 COMMON」は、和歌山市の委託を受けた「わかやま水辺プロジェクト（紀州まちづくり舎と水辺総研が共同受託）」による社会実験事業である。9月29日から11月5日までオープンカフェやマルシェ、カヌー体験などのイベントを行っている。
- ・道をはさんだ向かいには賃貸マンション「ハウスブルーネ」があり、通りに面する1階の空室をリノベーションして子供向け教室「PETERSOX」やおにぎり店「むすび家」などが入居した。1階の南側ベランダの柵を撤去して、店舗入口にしている。



4. 本屋 Plug とコワーキングスペース concent を見学

- ・Plug は3年前にシェアキッチンを開いたのが始まり。昼間の使い方を模索してカフェをオープン、その後、本屋も併設した。本屋を併設することで客層が変わってきた。カフェを利用しなくても本屋として入りやすくなったのか、一人客も多い。1、2階ともセルフリノベーション。
- ・オーナーの平野さんと小泉さんは東京からの移住組。
- ・2階のコワーキングスペース（concent）は10数人の会員がいる（当日も一人の女子学生が勉強中）。
- ・周辺に個性的な飲食店が相次いで出店している。連鎖的な反応になっており、興味深い。



5. ぶらくり丁商店街 ～石窯ポポロ、almo を見学

- ・石窯ポポロはリノベーションスクール第1回案件。オーナーで紀州まちづくり舎代表の吉川誠人さんはもともと市内近郊で「にここ農園」を経営する農家であり、2014年にリノベーションスクールに参加したのをきっかけに、農からまちへということで、ぶらくり丁でポポロハスマーケットを開催した。リノベーションスクールでは、当初は別の建物で農園レストランの事業提案を行ったが、2015年2月に現在の建物をリノベーションし、農園の野菜を生かした石窯ピザの店を開業した。
- ・2階はゲストハウス macomo になっている。もともと店舗併用住宅であったため、その住宅部分をリノベーションした。1人1泊5,000円、1人追加ごとに2,000円（最大7人）。
- ・野菜スイーツとパンの店 almo は石窯ポポロの向かいに2016年3月オープンした。オーナーは吉川さん。2階はギャラリー。



6. コミュニティスペース「みんなの学校」にて意見交換会

(紀州まちづくり舎 吉川誠人氏、和歌山市政策調整室 竹家正剛氏 が取り組みを説明)

- ・まちづくりが動き出すきっかけとして、リノベーションスクールの存在が大きい。和歌山市を何とかしたいという人たちが結構いることがわかった。スクールで案件ごとにユニットをつくり、民間自立型まちづくり会社「家守（やもり）会社」を中心に事業を推進している。家守会社は定期的集まって目線合わせの会議をしている。
- ・リノベーションスクールの案件の事業化率は67%である。
- ・リノベーションによるまちなか再生の方向性を共有するため、2016年度には和歌山市が検討委員会を立ち上げ、「わかやまリノベーション推進指針」を策定している。
- ・ぶらくり丁を中心とするまちなかの空き店舗率は30%であったが、各種の取り組みにより25%まで減少している。
- ・和歌山市職員の竹家氏はもともと個人的にリノベーションに参加していたが、公民連携の業務を立ち上げる際に自分がその担当になった。今後職場が異動になっても、個人で活動を続ける意向。
- ・和歌山市ではコンパクトシティを掲げ、立地適正化計画を策定するとともに、和歌山市駅の再開発や、市民会館の移転整備などを進めている。さらに昼間人口を増やすため、統合された小・中学校の跡地を活用し、まちなかに大学を3校誘致した。1,300人の学生が増加する見通しである。



- ・地域再生計画のなかに水辺の活用を入れている。このため水辺の占用許可を和歌山市が行ったり、社会実験「わかやま水辺プロジェクト」に取り組んだりということができている。
- ・和歌山大学の永瀬先生は平成 24 年に着任。南海電鉄との意見交換をきっかけに、和歌山市駅と市駅前のまちの歴史や現状を研究室で調査し、パネル展を実施したのが活動のはじまり。展示に訪れた商店街関係者とのつながりができ、まちづくりワークショップを開始した。当時は市駅の再開発は公表されておらず、乗降客数の激減や商店街の現状に対する危機感を地元住民とタイミング良く共有できた。
- ・市駅“グリーングリーン”プロジェクトは、市駅前通りの車道の一部通行止めにして天然芝を敷き詰め、マーケットやオープンカフェを配置する社会実験で、緑に囲まれた公共空間に人々が集い・憩う場所を生み出すことを目的とする。毎年多くの市民が来場し、来場者は和歌山市内が大半であるが、郊外に住む親子連れなど、まちなか以外に居住する人が多い。
- ・和歌山市では、市駅の再開発にあわせて市駅前通りを再整備し、歩道を拡張する計画を持っている。沿道の方々の歩行者空間の拡張に対する考えは、現在も賛否両論あるが、社会実験を実施しながら、今後も粘り強く話し合いを続ける必要がある。
- ・民間主導で実施している市駅 GGP の最大の課題は運営費であり、特に警備費に相当かかる。今年は行政からの助成金等も得られなかったため、クラウドファンディングも活用した。資金集めは大変であるが、徐々に支援の輪は広がっている。協賛金に加え、ベンチやパラソル、テントなどの物品の協賛もいただいている。



以 上